

第71歩

「丙午に少子化を考える」

今年の干支は丙午（ひのえうま）です。干支は、10干12支の組み合わせで一回りしますが、60年前の丙午の年には「丙午生まれの女性は男をダメにする」という根拠のない迷信が広がり、出生数は前年の約4分の3に急落しました。それでも当時、昭和41年には約136万人の命が生まれています。ところが59年後の令和7年は、確定値がまだ出ておりませんが、出生数約66万人と丙午ショックの時の半分以下に落ち込みそうです。これは、迷信によるものではなく冷酷な現実の重みのある数字です。この間の社会の変化に、少子化の要因があるような気がします。昭和41年の落ち込みは社会心理が作った一時的な谷で、翌年以降回復しています。しかし現在の出生数の減少は、結婚や出産が「したくてもできない」、「したくならない」と思わせる社会構造が続いてきた結果だとも言えます。賃金の伸び悩み、住居費の高騰、長時間労働、保育の不足、教育費の不安、キャリア中断への恐れなどなど。個人の意思だけでは乗り越えられない壁が、静かに出生数を削ってきたように思えます。少子化の影響は、「子どもが少ない」だけで終わる話ではありません。少子化が数年積み重なれば、地域の学校や医療、公共交通、産業の担い手、そして社会保障の支え手が細っていくのは明らかです。20歳の赤ちゃんが産まれるわけではないのです。いま必要なのは、産み育てたい人が出産、子育てを自然に選べる社会を整えることです。具体策としては、若年層の所得底上げと雇用の安定、家賃・住宅取得支援、保育施策の充実、男性の育休取得を当たり前にする職場改革、教育費負担の軽減、不妊治療や周産期医療への支援あたりでしょうか。迷信で出生が揺れた60年前に私たちは学んだはずですが。根拠のない噂や迷信が社会を誤らせることを。そして私たちは今、数字が示す現実を直視しなければなりません。丙午の谷を越えてなお、出生数がここまで減った社会を、次の60年にこのまま残して良いわけはありません。少子化は先送りできない課題です。社会の設計を子育てに優しい形へと組み替える必要性がますます高まっています。

